

* 答えはすべて解答用紙に書きなさい。

* 句読点・記号は字数に数えます。

* 本文は出題の都合上、一部変更しています。

次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

給食をなかなか食べおわらない女子がひとりいたため、あとかたづけに時間がかかり、ぼくは大急ぎでテニスコートにむかった。一年三組の教室がある四階から一気に階段をかけおり、昇降口を出てグラウンドに目をやると、テニス部の一年生たちが道具小屋のまえにかたまっているのが見えた。

「太二、おせえよ」

みんなより頭ひとつ背の高い武藤に呼ばれて、道具小屋へとダッシュしながら、ぼくはグーをだそうか、パーをだそうか悩んでいた。きのう、おとといとグーで助かっていたから、みんなそろそろパーをだそうと考えているかもしれない。いや、そうはいっても、「A」グーがつづく気がする。

★ 朝練で荒れたコートを、昼休み中にブラシでならすのは一年生の役目だった。ただし、二十四人全員でする必要はないので、グーパーじゃんけんの一発勝負で人数の少ないがわになった者たちが四面あるコートの整備に当たる。同数の場合は、前日に負けた手をだしたがわが負けになる。

「一中の男子テニス部にうけつがれてきた伝統だからな。誰かがひとりですることになったとしても、手伝ったりするなよ」

四月半ばに二年生の中田さんから言われたときに、グーパーじゃんけんだと結果がかたよって不公平になるのではと、ぼくは心配になった。

「まあ、やってみな。おもしろいもので、あんがい公平にいくから。いろんなメンバーでコート整備をするようになって、自然にチームワークもよくなるしな。毎日自分がやるものだとおもって、助かったらラッキーくらいに考えておくのが無難だけど、本気で読みを入れて勝負するのもおもしろいぜ。」「B」、かげで相談をして、誰かひとりをハメるのは絶対になしだぞ。わかったな」

いまはキャプテンになっている中田さんは、いかつい顔に似合わず気がきくひとらしく、こちらの懸念(「心配」)をあらかじめうち消してくれたのはありがたかった。さらに、いくら伝統だといっても、じゃんけんのせいで人間関係が悪くなつては意味がない。そのときは当番制に切りかえてやるから、遠慮なく言いに来いとフォローまでしてくれたが、ぼくは①ヨクジツから昼休みのじゃんけんが気になってしかなかった。

もつとも、中田さんが言ったとおり、たいていは十四人対十人くらいの結果におちついて、自分が少ないほうにはいったときでもア余裕をもつてコート整備をすることができた。一度だけ、グーが二人になったことがあり、ぼくもそのうちのひとりだった。勝負の結果を「嘆」いているひまなどなく、一人ともが左右の手に一本ずつブラシを持ち、無言でコートを掃いてまわった。「C」やりおえたときに昼休みの終了を告げるチャイムが鳴りだして、大急ぎでブラシをかたづけて教室にかけこんだあとにはしばらく汗がひかなかった。

ひとりになったら、絶対に時間内にはおわらない。そのときそうおもったが、さいわい十月半ばの今日まで、二十二人対二人というのが最大のかたよりだった。でも、「D」、グーかパーがひとりだけということになるかもしれない。

「おい、末永。早く来いよ」

ぼくがみんなの輪にはいりかけたときに武藤がどなって、ふりかえると末永が昇降口から出てきたところだった。長髪を、トレッドマーカーのヘアバンドでまとめた末永が、長い手足をふって一気に迫ってくる。

「太二、パーな」

1 武藤は小声で言うのと、そつぽを向いた。いままで一度もなかったことだが、みんながなにをしようとしているのかはわかった。やめたほうがいいよ、という言葉が口から出かかったときに末永が到着した。「悪い悪い。給食のあと、腹が痛くなつてさ」とおくれた言いわけをする末永を尻目に、「グーパー、じゃん」とみんなが声をだした。

「あつ」

自分だけがグーだとわかり、末永がしゃがみこんだ。うなだれた顔にかかった髪のスきまから、とがらせた口が見えた。

「すげえ偶然だな。おい、末永。手伝ってやりたいのは山々だけど、よけいなことをしたら先輩たちに怒られるからよ」

武藤は早口で言うのと、さあ行こうぜというように右腕をふった。ぼくは残つて末永と一緒にブラシをかけようかとおもったが、久保に肩をたたかれて、みんなにまざつて小走りで校舎にもどった。

たまたま末永がおくれたのかこつて、2 武藤がワナをしかけたのだ。もしも末永と同時に到着していたら、ぼくもグーをだしていたかもしれない。ぎりぎりセーフと安堵するのと同時に、末永がキャプテンの中田さんか顧問の浅井先生にこのことを訴えたいへんだと不安がよぎった。

3 中田さんはふだんはおだやかだが、一度怒ると簡単には相手を許さなかった。夏休みの練習で、数人の二年生が日かげでサボっていたときには、自分も一緒にやるからと二年生全員で二百回素振りをした。あらかじめ注意されていたのに、末永ひとりをハメたことがばれたら、どんな罰を与えられるかわからない。

こんなことなら武藤の言いなりになるんじゃないかと、ぼくは後悔していた。でも、聞こえなかったふりをしてグーをだしていたとしても、自分だけいい子になりやがつてと、みんなの反感を買っていただろう。

久保が武藤についたのも、4 ぼくにはショックだった。久保は小学一年生からの友だちで、超がつくほどまじめなやつだ。そのぶんかけひきがへたで、肝心なところで相手に裏をつけられる。グーパーじゃんけんでもよく負けて、三回に二回はコート整備をしていた。だから、というわけでもないが、ぼくは久保ならこういうときは絶対にとめるだろうとおもっていた。

武藤と末永はブレイススタイルがよく似ていた。二人とも百七十五センチをこえる長身で、威力のあるサーブ&ボレーを武器にしている。ツポにはまると手がつけられないが、ベースラインでの打ちあいをや②ニガテにしている、自分のイージーミスから崩れることが多いところまでそっくりだった。

ただし、武藤が練習熱心なのに対して、末永はすぐに手をぬこうとする。筋トレのときに、末永がまじめにやらなかったせいで、スクワットや腕立て伏せの回数を③フやされたことも一度や二度ではなかった。だから、武藤が中心になってハメたのはたしかに行きすぎだが、末永にまったく非がないわけではなかった。

そうはいっても、ひとりで四面のコートにブラシをかけるのはたいへんだ。末永の性格からすると、途中で投げださないとかがらない。それをきっかけに末永が退部したら、後味の悪いことになってしまう。

昼休みのおわり近くに、四階の教室の窓からグラウンドに目をやると、末永はまだブラシをかけていた。かなりがんばったようで、残りは半面だったが、そこで昼休みの終了をしらせるチャイムが鳴りだした。両手にブラシを持った末永は前かがみになって最後の力をふりしぼり、コートの端にたどり着くなり地面にひざをついた。

末永は放課後の練習にいつもどおり参加したので、ぼくは「胸をなでおろした。今回は大ごとにならずにすんだが、昼休みのグーパーじゃんけんがあるかぎり、こうした問題はくりかえされるのだとおもうと気が重かった。なにより、武藤の言いなりになってしまった自分が情けなかった。練習にも集中できず、ぼくはどうすればいいのかを考えながら家までの帰り道を歩いた。(中略)」

父の麻婆豆腐でおなかはいっぱいになったものの、グーパーじゃんけんをおわらせるアイディアはおもいつかなかった。テニス部の連絡網はわたされていたので、いつそのこと中田さんに話してしまおうと、ぼくは携帯電話を開いた。

しかし、キャプテンに直談判して当番制にかえてもらつたとしても、それなら誰がチクつたのだろうと、一年生部員のあいだに不信感が生まれてしまう。やはり自分たちで解決するしかないと思悟を決めて携帯電話を閉じたが、どうすればいいのかわからなかった。

「5 神様、雨を降らせて、明日の朝練を中止にしてください」

寝るまえに三度も「祈」つたのに、いつもと同じ午前六時に目覚まし時計に起こされて雨戸を開けると、空はよく晴れていた。一階では母が朝ごはんのしたくをしていて、父は母が帰ってくるまえに仕事に行つたという。

「学校でなにかあったの? おとうさんがメールをくれて、太二のことを心配していたから、おかあさん早引けしてきたのよ」

「夜勤のときは午前八時で④コウタイだったとおもいだし、ぼくは母にあやまった。

「心配させてごめん。でも、なんでもないんだ。おかあさんは、きょうは休み?」

「夜勤あけだから、あさつての朝まで家にいるわよ」

「そうなんだ」と答えながら、今夜は父と母がそろっているのだともうと、やるだけのことはやってやろうと気合いがはいった。母がつくってくれたベーコンエッグとトーストの朝ごはんを食べて、ぼくはラケットを背負い、かけ足で学校にむかった。

朝練では、一年生対二年生の対抗戦をする。シングルマッチで一ゲームを取ったほうの勝ち。四面のコートに分かれて、合計二十四試合をして、白星の多い学年はそのままコートで練習をつづける。負けた学年は⑤タマヒロいと声だしにまわる。

力試しにはもってこいだが、二年生との実力差は大きくて、これまで一年生が勝ち越したことはなかった。武藤や末永でも三回に一回勝てるかどうかで、久保は一度も勝ったことがない。ぼくは勝率五割をキープしていたが、団体戦に出場するレギュラークラスにはaが立たなかった。ただし、一度だけ中田さんから才金星あげたことがある。ベースラインでの打ちあいに持ちこんで、ねばりにねばって長いラリーをものにした。誰が相手であれ、きのうからのモヤモヤを⑥フキ払うためにも、ぼくはどうしても勝ちたかった。

ところが、やる気とは裏腹に、ぼくは一ポイントも取れずに負けてしまった。武藤や末永もサーブがまるで決まらず、ダブルフォルトを連発して自滅。久保も、ほかの一年生たちも、bもcも出ないまま二年生にうち負かされて、これまでにない早さで勝負がついた。

「6 どうした一年。だらしがねえぞ」

キャプテンの中田さんに⑦メイじられて、ぼくたちはグラウンドを走らされた。いつも先頭をきっているの、みんなの姿を見ずに走るのはなれていたが、今日だけは武藤や末永や久保がどんな顔でついてきているのか、気になってしかたがなかった。

誰もが、きのう末永をハメたことを後悔しているのだ。足を止めて、一年生全員で話しあいをして、昼休みのコート整備を当番制にかえてもらうようにキャプテンに頼もうと言いたかったが、おもしろくないまま、ぼくはグラウンドを走りつづけた。

「よし、ラスト一周。ダッシュでまわってこい」

中田さんの声を合図に全力疾走となり、ぼくは最後まで先頭を守った。「ボールはかたづけしておいたからな。昼休みのコート整備はちゃんとやれよ」

八時二十分をすぎたので、ネットのむこうは登校する生徒たちでいっぱいだった。武藤に、まちがっても今日はやるなよと釘を刺しておきたかったが、息が切れて、とてもdをきくどころではなかった。

ラケットを持って四階まで階段をのぼりながら、ぼくは武藤と話さなくてよかったとおもった。ぼくが武藤を呼びとめていたら、ほかの一年生はぼくたちがなにを話しているのかと、気になってしかたがなかったにちがいない。武藤だけではなく、久保か末永を呼びとめていても同じ不安が広がっていたはずだ。⑧レイセイに考えれば、きのうのことは一度きりの悪だくみとしておわらせるしかないわけだが、疑いだせばきりがいいのも事実だった。

もしかすると、みんなは今日も末永をハメようとしていて、自分だけがそれを知らされていないのかもしれない。もしかすると、きのうのしかえしに、末永がなにかしけようとしているのかもしれない。もしかすると、二、三人の仲の良い者どうしであわせて、たとえ負けてもひとりにはならないように⑨安全サクをこうじているのかもしれない。

ウラでうちあわせ可能な手口がづぎづぎ頭にうかび、これはおもっている以上に厄介だと、ぼくは頭を悩ませた。

やはりキャプテンの中田さんに助けを求めようしかない。そうおもったが、それをおもいとどまったのは、きのうから今日にかけて、一番きついおもしろいのは末永だと気づいたからだ。末永以外の一年生部員二十三人は、自分が加担した悪だくみのツケとして不安におちいつているにすぎない。それに対して末永は、今日もまたハメられるかもしれないという恐れをかかえながら朝練に出てきたのだ。最終的に中田さんに頼むとしても、まずはみんなであやまり、そのうえで相談するのが筋だろう。

そう結論したのは、三時間目のおわりぎわだった。おかげで授業はまるで頭にはいつていなかったが、ぼくはようやく自分のすべきことがわかった気がした。そこでチャイムが鳴り、トイレに行こうと廊下に出ると、武藤が顔をうつむかせてこつちに歩いてくる。

「よお」

「おつ、おお」

武藤はおどろき、気弱げな笑顔をうかべた。そんな姿は見たことがなかったのも、もしかすると自分から顧問の浅井先生がキャプテンの中田さんにうちあげたのではないかと、ぼくはおもった。たつぷり怒られるだろうが、それで⑩ケリがつくならかまわなかった。

それなら、昼休みには浅井先生が中田さんがテニスコートに来るはずだ。

給食の時間がおわり、ぼくはテニスコートにむかった。しかし集まったのは一年生だけだった。ぼくは落胆すると同時に⑪自分の甘さに腹が立った。

いつものように二十四人で輪をつくったが、誰の顔も緊張で青ざめている。末永にいたっては、⑫歯をくいしばりすぎて、こめかみとあごがびくびく動いていた。いまさらながら、ぼくは末永に悪いことをしたと反省した。

しかしこんな状況で、きのうはハメて悪かったと末永にあやまつたら、どんな展開になるかわからない。武藤をはじめとするみんなからは、よけいなことを言いやがってとうらまれて、末永だって怒りのやり場にこまるだろう。

だから、一番いいのは、このままふつうにグーパーじゃんけんをすることだった。うまく分かれてくれればいいが、偶然、グーかパーがひとりになる可能性だってある。ハメるつもりがないのに、末永がまたひとりになってしまったら、事態はこじれておさまらなくなる。

みんなは青ざめた顔のまま、じゃんけんをしようとしていた。どうか、グーとパーが⑬ギントウに分かれてほしい。

こぶしを顔の横に持ってきたとき、ぼくの頭に父の姿がうかんだ。一緒にテニスクールに通っていたころ、父は試合で⑭会心のショットを決めると、応援しているぼくたちにむかって⑮ポーズをとった。ぼくや母も、同じポーズで父にこたえた。

「グーパー、じゃん」

かけ声にあわせて手をふりおろしたぼくはチョキをだしていた。本当はVサインのつもりだったが、この状況ではどうしたってチョキにしか見えない。ぼく以外はパーが十五人でグーが八人。末永はパーで、武藤と久保はグーをだしていた。

ぼくが顔をあげると、むかいにいた久保と目があった。

「11 太二、わかったよ。おれもチョキにするわ」

久保はそう言ってグーからチョキにかえると、とがせた口から息を吐いた。

「なあ、武藤。グーパーはもうやめよう」

久保に言われて、武藤はくちびるを隠すように口をむすび、すばやくうなずいた。そして、⑫武藤は握っていたこぶしから人差し指と中指を伸ばすと、ぼくにむかつてその手を突きだした。

武藤からのVサインをうけて、ぼくは末永にVサインを送った。末永は自分の手のひらを見つめながらパーをチョキにかえて、輪のなかにさしだした。

「明日からのコート整備をどうするかは、放課後の練習のあとで決めるよ。時間もないし、今日はチョキがブラシをかけるよ」

そう言って、ぼくが道具小屋にはいると、何人かの足音がつづいた。ふりかえると、久保と武藤と末永のあとにも四人がついてきて、ぼくは八本あるブラシを一本ずつ手わたした。

コート整備をするあいだ、誰も口をきかなかった。ぼくの横には久保がいて、ブラシとブラシが離れないように歩幅をあわせて歩いていると、きのうからのわだかまりが消えていく気がした。

となりのコートでは武藤と末永が並び、長身の二人は⑬大股でブラシを引いていく。コートの端までくると、内側の武藤が歩幅を狭くしてきれいな弧を描き、直線にもどれば二人ともがまた大股になってブラシを引いていく。

⑭きつと、ぼくたちはこれまでよりも強くなるだろう。チーム全体としても、もつともつと強くなれるはずだ。

ぼくはいつか、テニス部のみんなに、父がつくった豆腐を食べさせてやりたいとおもった。さらに、このコートで家族四人でテニスをしたいとおもい、押入れにしまっている四本のラケットのことを考えた。ぼくはブラシを引きながら、胸のなかで父と母と姉にむかつてVサインを送った。

金星

	タマヒロ		キン トウ	
	い	い		

11

1000

[illegible]

	197	200	222	244	266
197	1.00	0.99	0.98	0.97	0.96
200	0.99	1.00	0.99	0.98	0.97
222	0.98	0.99	1.00	0.99	0.98
244	0.97	0.98	0.99	1.00	0.99
266	0.96	0.97	0.98	0.99	1.00

1



1



[illegible]